

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第792号 平成26年8月25日

つながり格差（3）

学力には「見える学力」と「見えない学力」があるという学力観、更には、志水教授が示している「学力の樹」というものを頭に置きながら子ども達の中の学力格差を考えてみた時、子ども達を取り巻く家庭や学校、更には社会環境の影響が非常に大きい事が分かります。

子どもの教育に関心を持ち、子どもの才能や個性を伸ばすために色々な習い事をさせ、また、子ども達の余暇活動にも熱心という家庭と、朝食も満足に与えず、子どもを放任している家庭とで、子どもの学力に差が付く事は容易に想像する事が出来ます。

また、学校においても、一人ひとりの子ども達としっかりと向き合い、愛情と熱意を持って指導する教師の下で学ぶ子どもと、仕事として義務的に指導する教師の下で学ぶ子どもとの間に生じる学力差を、否定する事は出来ません。

更に、経済的に貧しく、子どもの学力に関心のない家庭が多いといった地域と、学校と連携しながら積極的に子ども達と関わって行こうとする家庭が多い地域とでも、学力格差が生じる事は避けられません。

志水教授は「名選手は才能だけで生まれるものではない。その才能をうまく引き出す環境が与えられてこそ、更にその環境が提供するものを上手に摂取し、自己の成長に役立てる事が出来た者こそ、名選手と呼ばれる存在となり得る」と述べています。

子ども達の学力を全国一に押し上げた秋田県には、そうした環境が用意されていたという事であり、志水教授は、秋田県の子ども達は、『地域・学校・家庭のつながり』の中で、子ども達が安心感・安堵感を持って生活している。祭りや共同作業における『地域の人々とのふれあい』、農業や三世同居やスポーツを通じての『家族とのふれあい』、そして豊かな『自然とのふれあい』。そうした社会的背景のもとで、秋田の子ども達はすこぶる真面目に学校での勉強に取り組んでおり、それが学力調査の結果につながっていると分析しています。

志水教授は秋田の子ども達と大阪の子ども達を対比しながら、子ども達が大人に保護される度合いが高い秋田に比べると、大阪を代表とするような大都市部の子ども達は、早くから「世間の風」や「消費文化の大波」にさらされる度合いは間違いなく高い。前者のタイプの子供達は、ほとんどの場合、少なくとも中学校を終え

る頃までは、親や教師といった周囲の大人がいう通りに「まじめに勉強に取り組む」だろう。しかし、後者のタイプの子ども達は、周囲の環境が整わず学校文化以外の誘因が強力である場合には、「急速に勉強に対する意欲を失う」か「得だと考えれば仕方なく勉強する」かのどちらかとなるだろう。その結果として、「年齢の進行と共に学力格差は避けがたく進行する」と指摘しています。

家庭での勉強時間は短く、一方、テレビを見たりゲームに興じたりする時間が圧倒的に長い北海道の子ども達の現況をみると、胸が痛くなります。

このように、子ども達の学力が、子ども達を取り巻く環境によって大きく影響されるとすれば、子ども達の学力の格差を克服し、基礎基本の学力を身に付けさせるためには、子ども達を取り巻く人間関係を豊かなものにする、即ち「つながりの再構築」が必要だというのが志水教授の主張ですが、この事は、学校のみで子ども達の学力を引き上げる事の困難さを示しているともいえます。

その意味で、学校の取り組みだけがやり玉に挙げられ、批判されるというのは問題だと思いますが、さりとて、学校の取り組みが今のままで十分かといえ、私はそうは思っていません。何故なら、子ども達の学力引き上げという課題の克服にとって学校こそが本丸だと思うからです。

不利な環境にある子ども達に対して、学校が手を拱いている訳にはいかないはず。何故なら、どのような環境に置かれている子ども達に対しても基礎基本の学力を身に付けさせる営みは、学校にしか出来ない（いい方を変えれば、学校だからこそ出来る）事だからです。

学校として「なし得る事をし尽くしているか」、自らに厳しく問いかけるべきであり、その与えられている使命と責任の重さを、一人ひとりの教師は自覚すべきではないでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）